

青年学校での教練のこと、食糧事情、応召兵の見送りなどのこと

細見久雄さん(丹波篠山市在住 10代の頃の話)

#### ◎青年学校での思い出。

小学校卒業後、雲部青年学校に入り、火曜・金曜日に教練を受けた。冬場および春の農繁期は、教練は無かった。夏場の教練は厳しかった。

昭和19年1月6日、5日頃に、青年学校に来ていた先生からグライダーの訓練に行くよう指示され、篠山でグライダーの訓練を受けた。

青年学校での教練は厳しかった。「軍隊行って苦勞するのが嫌やったら今のうちに覚えとけ」といって徹底的に教えられたから。教えるのは現役の軍人ではなくて在郷軍人か下士官。兵長、伍長、曹長のいたときは厳しかった。指導員は殴ったりなどはしなかったが、厳しかった。7月、土用の頃などの午前中、教練がやれやれ終わり最後に整列したときに、少しでもだらけていたら駆け足をさせられた。1kmほど走って終わる。そんなことがたまにあった。

#### ◎実家での食糧事情

戦後のことだけれども高粱(こうりゃん)飯を食べた。高粱は搗いて皮をむかないといけないもので、そのままでは炊けない。当時は精米機が無かったから殻を搗いて剥いた。高粱は味が無いから臭いもない。ちょっと小豆ご飯みたいに色がついている。小豆ご飯のようだから食べられた。

#### ◎徴兵のこと

普通は、現役は20歳で行っていた。それがだんだんと人が少なくなっていったので、昭和19年に、一年繰り上げて19歳で現役で行かなければならなくなった。自身は1月生まれであるけれども、誕生月が来たら召集が来ていた。同級生でも一人、召集が来た。(昭和20年)8月9日か10日くらいに、どこの部隊かは知らないけれど召集が来たといふので、その人の自宅まで餞別を持って行った。「お前、元気でいけよ。僕も、そのうちに行かんなん」と言っていたら、一週間で終戦になって戻ってきた。

兵隊に行ったら七分死んで三分の命。覚悟はしていた。召集命令で行ったのは6人で、自身を含めた3人で見送りの準備をした。準備をする人もいないので、皆で「おい、今度はワシらがしてもらう番になったのう」と言っていたら終戦になった。

見送りは、村の小さいお宮さんで、紅白の柱をコの字型に立てて、そこに日の丸を交差させて掲げた。その足元には小さい松の木を飾った。松の木はいくらでもあった。神主さんが来て拜んでもらった。小さいテーブルを準備して。それが皆、自身たちの仕事だった。おかげさまなのか、雨は降らなかった。

### ◎篠山連隊での伝染病（発疹チフス）のこと

戦時中、篠山連隊に発疹チフスが出たらしい。篠山の部隊の後ろに衛戍病院があったのだけれども、収容しきれないものだから兵舎の一部を病室として使っていたらしい。そして、兵隊に伝染してはいけないから各学校に分散させた。多紀郡ではどこまで行ったのか、記憶している限りでは村雲と雲部と日置と畑には分散していたのを知っている。ここの、雲部の講堂にもいた。隊列を組んで歩いている様子からみれば5、60人くらいだったと思う。

あの時、自身と同級生一人と一つ年下の人の3人で自転車で歩いていた。訓練用の鉄砲を担いで3人で細工所まで帰ったら、福住の方から兵隊が手ぶらで帰ってきていた。兵隊がすることが無いので、運動がてら歩いてきたのだと思う。

学校の中に入ったら一人の兵隊が「君たち恰好しとる。（鉄砲）持っとるだけましや。僕ら何もしや」と言った。返す言葉がなく、笑っただけだった。

### ◎篠山連隊の訓練

篠山の連隊は、部隊の裏の盃山（盃を伏せたような形の山）の頂上まで早駆けしていた。田舎の兵隊はともかく、都会から来た兵隊は皆往生していたらしい。あの頃はなんでも命令的に動かなければならない時代だったので、良いも悪いもない。

ある時、一中隊が来た。きょうだい3人で土手に上がり手を振ったら、兵隊が手を振ってくれた。